

創刊の辞

本学の起源は、一八一一年に江戸幕府の天文方に設けられた蛮書和解御用にまで遡る。それはやがて蕃書調所（一八五六）、開成所（一八六三）に発展し、明治維新後に開成学校（一八六八）、東京大学（一八七七）そして明治一九年（一八八六）の帝国大学の成立に至るのである。このような東大の出自をめぐる、科学史家の中山茂は「もともとは外国語を翻訳するところ」と指摘する（『帝国大学の誕生』）。しかしその外国語とは欧化政策推進のために必要とされるヨーロッパ語であり、中国語は「翻訳」の対象とは見なされていなかった。

たしかに一八七七年の東大発足時にすでに和漢文学科が設けられており、一八八五年には哲学科、和文学科と並んで漢学科が文学部を構成する三学科に名前を連ねてもいる。そして一九〇四年に行われた東京帝大文科大学の大改革に際しては、漢学科も支那哲学と支那文学とに分離し、現在の中文科の前身が形づくられてはいる。しかしこれら漢学科、支那文学科では久しく日本の文化として中国の古典が講義され、そしてテキストは中国語ではなく漢文訓読法で読まれていた。一八八九年に中国人講師が実用語学教育のために任命され、東京帝大においても中国語教授が始まるが、倉石武四郎（一八九七〜一九七五、一九二二年卒）によれば、これを受講する学生は皆無に等しかったようである（『中国語五十年』）。明治天皇制下において漢学科は体制教学として機能していたといえようか。

『東京大学百年史』（一九八六）は、中文科の節で「中国文学の研究教育がようやくその実を備えるに至ったのは、塩谷温に始まる」と記している。同書の塩谷温（号は節山、一八七八〜一九六一、一九〇二年卒）に関する記述をま

とめると、塩谷は講師、そして助教となつた一九〇六年にドイツと清国に計六年間留学、一九一二年の帰国後は、日本のアカデミズムにおいては最初期に戯曲小説研究を開始、一九二〇年には第二講座を担任し『元曲研究』で博士号を授与されており、その俗文学研究は魯迅の中国小説史研究などにも影響を与えた。

一九三九年に塩谷教授が退官したのち教授に就任した倉石武四郎について、『東京大学百年史』はその講義が「質問的組織的な中国語学講述の始め」「古典文学全般に通暁していただけでなく、俗文学研究では……新分野開拓に積極的で……現代文学に寄せる関心にも深いものがあつた」と述べている。先に引用した著書で、倉石はその学生時代に「(英語やドイツ語と比べ)漢文だけは、あるいは支那文学だけは、不思議なことをやっているものだと考えた。原文をみながら、その漢字をひっくり返していちいち日本語にして読」むとは……という疑問を抱き、中国語で読むことを志すようになったと述べている。同時代の中国で進行していた文学革命が、若き日の倉石の心を揺り動かしたのである。

竹内好(一九一〇〜七七、一九三四年卒)が東大支那文学科に入学したのは満州事変勃発五か月前の一九三一年四月のことであつた。北伐戦争(一九二六〜二八)による統一後、国家建設が着々と進む中華民国と、旧来の權益確保に汲々として武力行使に及ぶ大日本帝国——中国の問題が日本の将来を左右するものとして竹内ら若い学生の胸にひしひしと感じられたことであろう。竹内は三年後に一年先輩の岡崎俊夫、同期の武田泰淳らとともに中国文学研究会を設立している。ちなみに支那文学科独立後第一回の卒業生(一九〇六年)以来、その数は若干名であつたが、一九二八年以後は一〇名前後から二〇名近くを送り出していたもようである。ただし一九三二年から敗戦までは本学科は支那哲学科と合併し支那哲学支那文学科と称していた。

敗戦翌年には支那哲学科との合併も解消されて独立し、一九四七年に東京帝国大学は東京大学と改称、四八年には科名も中国文学科と改称された。倉石教授は一九五五年に、竹内好の五年先輩で中国文学研究会の同人でもあつた小

野忍を助教授に招聘して近現代文学の講義を開いた。これに先立つ一九五二年には、学生・院生により魯迅研究会が結成されている。のちに近現代文学ばかりでなく古典文学・言語学、中国哲学・思想の各分野で活躍する多くの研究者がこれに加わっているのは、東大中文科で醸成されてきた同時代中国、外国文学としての中国への関心という風情がここで固く根付いたことを示すものであろう。

さて中文科の名称は一九六三年における文学部の四類二一専修課程体制への改革にともない、第三類（語学文学）中国語中国文学専修課程へと改称され、後述の大学院重点化に際する文学部の四学科二六専修課程体制への移行後も引き続き同専修課程名を称している。しかし今日でも研究室の内外では中文科の旧名が愛用されている。

本学科の主任教授は、一九五八年に倉石教授が退官したのちには小野、藤堂明保、前野直彬、伊藤漱平、丸山昇、平山久雄、丸尾常喜の各教授がこれを務めてきた。一九九四年には文学部の大講座化が実現し、従来の教授・助教授・助手各二名から成る二（小）講座制が、教授三・助教授二・助手一という大講座制に移行している。新しい大講座制のもとでは主任教授の任期は原則二年として各教授が交代でこれを務めており、その最初の任を担ったのが戸倉英美教授であり、私、藤井が現在その任にある。なお文学部では一九九五年度より大学院重点化にともない大学院人文学部研究科が人文社会系研究科に改組されたうえで部局化されている。これによりそれまで学部講座の専任であり、大学院の教育担当は兼任として行っていた教官は、大学院重点化の改革により大学院講座の専任となり、学部を兼任する形式となっている。

このように長い歴史を持ち多くの変革を経てきた東京大学文学部中国文学科は、これまで多くの先学を輩出しており、現在もまた優れた学徒を養成しつつある。大学院生は博士課程一二名、修士課程一〇名、研究生五名を、学部生は三・四年生をあわせて一四名をそれぞれ数え、在籍学生の合計数は四一名に上る（九七年三月現在）。私ども教官・院生・学生は本学科の長い中国語学中国文学研究の伝統に深く学びこれを継承するいっぽうで、新たな研究テーマ・

方法・分野の開拓を日々試みているのである。

さて私どもはこのたび本学科の研究・教育活動の報告の場を作ることを目的として、本紀要の創刊を決意した。是非とも本学科の諸先輩ならびに日本をして世界の先学・同学の御指教を頂戴いたしたく存する次第である。

一九九八年四月一日

東京大学人文社会系研究科・文学部中国文学科主任教授

藤 井 省 三